

心の窓を見て「岸本は何より先づ節子の卒直な告白をうれしく思つた。『創作』といふ言葉でもつて二人の間の結びつきを言ひ表はさうとしてあるのにも心を曳かれた、その時になつて假令誰にも赦されなくとも、岸本はあの不幸な姪だけには赦されたことを悟るやうになつた。」——これは、あの佛蘭西の旅で自らの態度をほぐし、信の更生を願つて歸つて來た

## 日本語表現法のたんれん

藤原 與 一

岸本の胸に實現した星のやうな光りをもつた節子の心の花であつた。泌み泌みと岸本の心は武藏野の土に吸はれてゆき、そこに育つ草木の愛を語るごとく靜かに節子の言ふ『創作』を語つてゐる。又武藏野の冬を巴里の冬と比較して、春待つ深い童心に歸ることが出來た自分を見出してゐる。

これは大きな研究問題である。こゝでは、一つの見解にもとづいて、日本語の知的な表現法の面に注意し、それについて、たんれんの必要があると思はれることをのべてみる。

### 二

ことばののべかたは、ものの考へ方である。國語には、どの國語にも、その國語のもの言ひの言ひあらはしかたがあり、それは、その國語の人々の、ものの考へかたを示す。人は、そのことばでものを言ふやうに、考へる。考へるやうに、言ひあらはす。表現法とは、そのやうな言ひあらはしかた、のべかたを言ふ。

日本語の表現法には、どのやうな特質が見られようか。こ

外國語をほんやくした文章を見て、はつきりとつかまされるのは、彼我のことばののべかたの、精確度のちがひである。知的な一般の文章表現を見た時、西洋語のものとのべか

たは、いかにも精確であると感ぜられる。ほんやくしたものを  
を見ると、兩方のちがひが、こんなにもかと、つよく感じら  
れる。ほんやくしたのを見ることによつて、ふしぎによく、  
先方のもの言ひの言ひぶりが、その日本語とのちがひが、思  
ひ見られる。忠實な逐語譯の長いセンテンスなどでは、ほん  
やくしてあるのによつて、かへつてよく、外國語の方の精確  
なものの言ひあらはしかたを察することができる。持つてま  
わつた言ひかたをさせられてゐる日本語文のほんやくから、  
逆に、むかうの、こまかに行きとゞいたものの言ひぶりを知  
ることが出来る。ここでは、日本語は、ふりまはされてゐる  
とも見られる。ほんやくで、日本語がふりまはされてゐるか  
に見えるところから、彼我の表現力の差がうけとられはしな  
いか。西洋語の言ひかたは、こまかに分析して、いくぐりぐ  
りとゑりこんでいく。こまかくするどく、のべきつていく。  
えぐりとり、言ひきる。のべぬく。どのやうな障害もつきき  
つて、つまづかないで、よろけないで、のべつくす。犀利周  
匝はかれの長所である。その粘稠性は、われに見られない。  
あくまでえぐつていくやうな、するどい、ねばりづよい知力  
は、われの表現には見られない。行きとゞく表現法、きれこ  
みのふかい表現法を、かれに見る。

### 三

西洋語の表現法は精確である。そこに、日本語表現法との  
ひらきを見る時、彼我の思索能力の差を思はないではなら  
ない。かれは、ことばのとほりに思考の精確なゑりこみかた  
をするであらう。われが、さつと、あつさりとしか言ひあら  
はし得ないでゐるところを、かれが、ぐりぐりとほりさげ  
て、くはしく言ひこなしてゐるのを見ると、われの考へか  
た、考へのふかめかたがつく／＼と思ひやられる。言語表現  
の精確度と、思索のふかさとは、ひきはなすことができな  
い。表現の平明とは、その平明が、たけの高い平明になるの  
でなくてはならない。たゞあつさりとしてゐるだけで、かん  
たん平明なのは、正しい意味の平明ではない。自然的言語の  
平明をぬけ出て、ねられたことばの平明になるのが、平明の  
ありかたである。

西洋語は、形式論理から言つて、論理的なのであらう。理  
的に、目のつんだものと思はれる。日本語をきたへるのに  
も、けつきよくは、理的にきたへるよりほかはなからう。日  
本語の表現力をきたへふかめるには、西洋語の、いま言ふ論  
理性、あるいは合理的な粘稠性を見て、そのやうに論理的に  
／＼と、きたへていくことが必要である。そのやうにして、  
日本語のひだを多く深くし、日本語の思索力を強靱壯大にし  
なくてはならないと思ふ。眞の言語文化の昂揚は、それから  
のことである。

#### 四

日本語には、日本語表現法の長所もある。しかし、知的な表現において、くまなくまで考へをふかめ、これを明らかに言ひきつていくちみつさ、するどさがないとすれば、これは一つ、弱点と自覺して、きたへていかななくてはならない。持ちまへの長所がまにあはねば、それから先は、心がけて、みづから開くべきである。そこに、理的なたんれんが考へられる。日本語が西洋語を見たといふことは、大きな、たんれんの道を知つたことにならう。

西洋語を見なくても、一つの反省の立場があつてよいはずである。

その一語一語を學ぶことが本人の一生の上にとんな幸福をもたらすか。(一一一頁)

いま目の前にある言葉がどういう特性を持っているか、どういう價值を持つているか、どういう意味を持つているかということ、目の前の一語一語について見分けをつけて教へたいと思う。(一一四頁)

「國語國字問題と國語教育」所收、桓内松三先生「國語教育科學の建設」

といふやうなこと、一語を見、一語に問ふといふやうな嚴肅な言語態度は、表現法たんれんのものである。われ／＼の

ことばの生活には、いままでに、どのやうな建設の意欲があつただらうか。きりつめたところで、一語をこのやうに重んずる心がまへが、はたしてできてゐたであらうか。一語に徹する嚴格な態度に目ざめるところから出發することの意義は大きい。

みづからのものを、高めようとする意欲が、根本にたいせつである。

もとめて西洋語を見れば、どのやうなたんれん道が見いだされるだらう。

#### 五

日本語の表現法と、現代西洋語の表現法とで、はつきりとみとめられる大きなちがひは、ふつうの言ひかたで、動詞の位置が、一方は前、一方は後になることである。西洋語では、一般に、動詞が早く出る。日本語では、おそく、あとの方に出る。命令のふつうの言ひかた一つを考へてみても、西洋語では、動詞がさいしよに出るが、日本語では、たとへば、「さうします。」と言ふ時とおなじやうに、「さうしろ。」と言ふ。問ひの文で、西洋語が動詞を早く出して、日本語では、「あなたは本を持つておますか。」のやうに言ひ、やはり、動詞をうしろに出す。問はない文の時とおなじやうな動詞の位置である。

こんなに、動詞がうしろにあるといふことは、さういふ意味を持つであらうか。西洋語で、動詞が早く出れば、言ひたことは、はじめにはつきりとする。それにくらべると、日本語では、言ひたいときまつたことが、しまひまで行かないと、はつきりしない。動詞が出はじめてから、ことがだんだん明らかになる。たとへば、いるいらぬといふことでも、西洋語では、それが早くもことばにきまるのに、日本語では、うしろの方へ行かないと、きまらない。それも、つがうで、言ひかけてまた、いるいらぬのおもむきを、かへ直すこともできる。ことばにきめるきめかたが、ゆうづうがきいて、きめをあとへひきのばすことができる。動詞、あるいは用言的な言ひかたを、あとにおく言語構造からくることである。

西洋語の表現法に、このやうな、動詞あるいは動詞的なものを早く出すといふ、一大特質がある。日本語の表現法は、動詞後出を一大特質とする。その差は、表現が早くはつきりとするしないの差と見られる。早くはつきりしない日本語の表現法として、精確な表現能力を持つ西洋語にまなぶとすれば、一つには、この、動詞的な言ひかたの早く出て、ことが早くきまる点に注目する必要はないだらうか。

## 六

日本語で動詞あるいは動詞的な言ひかたを早くするのには、一文を短くするよりほかはない。長ければ、しぜん、動詞はあとになり、もの言ひの、ことばにきまるきまりかたは、あとにのびる。のびれば、うけとり手には、わかりのおいことばになる。はつきりつかめることの、のびることばになる。これは、西洋語の言ひかた、早く内容をはつきりとさせる利点に遠ざかることである。このきよりをちとめるのには、日本語の文表現を、つとめて短形のものにくぎつていくのこしたことはあるまい。

西洋語の長いセンテンスの、えぐりとつたやうなきはどい言ひかたに對しては、短文主義で、これをつぎんにたゞみかける方法でついでいく。動詞的な言ひかたを早くよんで、ことを明確にし、一文を早くきりあげては、その明確なところで、つぎの文表現を展開させるといふやうにすれば、どうであらう。たえず明確度を高くする。短文に表現する。その明確度で押しつけていけば、西洋語のくはしい分析的な表現を、日本語は、文文にくぎつたのべかたで、はたしていけるのはなからうか。西洋語の複雑な言ひかたを、短文連鎖でほぐすとも考へることができる。きりの、かつきりとついた、力づよい短文の表現によつて、あやふげなく思考をすゝめ、思索のひだを深くすることができればよからう。こゝに、日本語の思索力、表現力の向上が期待される。

さて、日本語の表現法を、短文本位にするやうにつとめるのには、どのやうなくふうがいらうか。一つには、動詞または動詞的な言ひかたの修飾を簡明にするのがよいと思ふ。修飾が複雑な時には、とかくそこでわづらひができて、そのあとの言ひかたが長くなる。動詞なり動詞的な言ひかたなりは、すなほに早くよばれない。修飾語が簡明であれば、そのはたらきは單直に下におよんで、動詞的な言ひかたが、まぎれなく出てくる。

問題は動詞的なもの出かた、早く出るといふことにあつて、早く出れば、文は短くなる。さう、動詞を主体にして考へるので、つゞいて、副詞などのいるくゝの修飾語、修飾法の問題がうかぶ。動詞さへ早く出ればよい。そのためには、修飾語は、出されるのなら簡明に出されるのでなくてはならない。

簡明であれば、それが動詞的なものをみちびくことも、直接的であらう。一つの副詞が出て、それがすぐに動詞をよんだ場合には、文は、もつとも手ぎはよく、かんけつにをさめられる。

修飾が、たゞの修飾でなくて、多くの内容を持ったものであれば、修飾語句をわることを考へればよからう。わつて一

つの修飾語を立てれば、すぐに手ぢかに動詞がよばれて、まがりくねりのない言ひかた、一つの短文表現ができる。しぜんに、その短文が、つぎの、のこりの修飾語を生かした一短文のかんけつなものをよばう。修飾語をわつて、一つくゝを簡明にしたので、さいはひに、のぞましい短文連鎖の發展的なものが得られることになる。

## 八

以上は、日本語表現法と西洋語表現法とを見くらべたうへの、一つの考へであつた。日本語の見かたも、動詞を中心としただけでは足りない。たんれんすべきことも多い。が、どのやうに見、どこをどうたんれんするにしても、それがつねに、日本語の表現能力を強大にするものとならなくてはならないことは、言ふまでもなからう。

個々人にとつては、さきに、表現能力とは何かの問題がある。表現法のたんれんといふことも、われくゝにとつては、自己の思索力深化の道を求めに求めていくといふことにほかならない。(昭和二十三年四月十八日)